圖解

量地指南後編

五

ム1
5275
8

門ム
5275
8

戸川藏書

量地指南後篇巻之五

勢南　處士　村井昌弘編述

渾發術

渾發切要

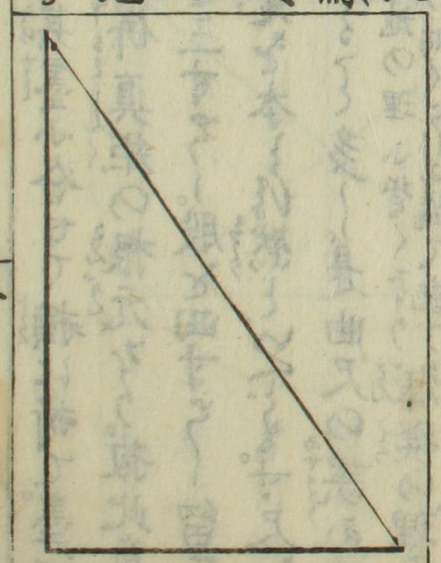
量地術ハ器械を用て。廣狹遠近高低深淺を量ること。初中終の三段ハ。學習すること。亦是ハ隨ふ。其初ハ見盤を用て。一切の形を盤面ハ摸し。其中ハ元器を用て。大小の事業を十字に顯し。其終ハ渾發を携て無量の妙術を一本に盡す。蓋見盤の業ハ此地の種を以て。彼所の形状知る。諸の地勢を摸し取術なり。元器の業ハ當支の順逆を野帳道作ハ記し。分度の矩を以て方角を糺し。圖画に顯す術なり。扨渾発の業ハ見盤元器の両術を。此一本に畧

東京帝國大學圖書藏
昭27.6.4

きて遠近廣狹高下淺深洩す所なく詳ふ摸す妙術あり故ふ俗ふ本術ともいふ其此渾発を用ゆる修練の功要八箇ありて一曰堅体之法二曰射形の習三曰頰尺之定法四曰物見之次第五曰摸手之定寸六曰右手頰尺七曰左手揮発八曰縱横之習以上是なり最其功要を審ふすべし柳又渾発の妙用たるや鈎股弦三四五の形ふ法ゑ萬象を立所ふ摸し出すは神器なり此器元來量地術一用の為ふ制するふ非ずといへども諳ふ量地の法ふ叶ふ微妙なるべし夫三四五の矩ハ陰陽合和の数ふして量地術の根本なり方四曲直より千形萬品此理ふ洩るることなし因て其自在妙用の一二を左ふ記して學者を曉す見るべし

算理渾發　三四五矩

傳云算理渾発といふ三四五の矩ふ本けり此ハ器物ふあり真矩の発見規矩古傳ふ量地術を規矩術といふ根元也易傳序云数也易也其理一ふ即此理ふ算法ふ此矩を鈎股弦といふ凡規矩の術ふ三四五とふ縱ふして直き物ハ垂縄なり是を三といひ股といふ又横ふして直き物ハ水平なり是を四といふ是を總て真矩といふ蓋是ハ其理といふ實ふ真矩尺を寫す器ハ即曲尺是なり然ども其制兼ふして真矩ふ叶ふ曲尺あるべし希なり故ふ量地術ふ於て其矩を求め極む



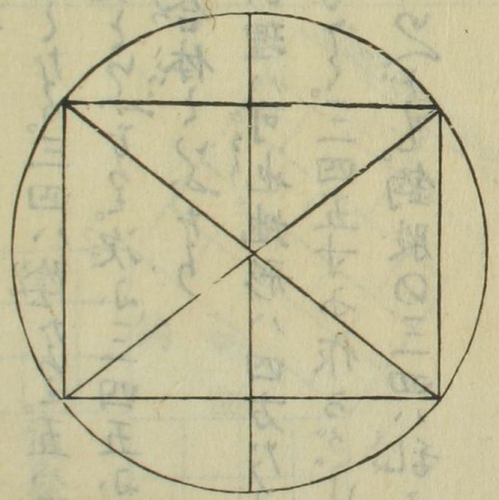
法ハ紙を縦ふ折て墨を引こ。其墨ふ合せて横に折て墨を引けば。乃十字ㄐ形となる。是併真矩の根元なり。扨此真矩を得るこ。圖のごゝく。鈎を三すこ。股を四すこ留て弦を引渡す時ハ五すなり。是を本とし。然ともこゝ。寸尺と用るとしハ。三四五其寸ふ合ざるこ多ゝ。是曲尺の誤ある所なり。三四五寸に合さる則ハ天地の理ふ背くなり。昌弘曰此言古傳の云処なり。姑くこれふ隨て記す。渾癸の理ふ寸尺間町ふ拘らず。是を開て寸尺間町に名く。妙用其中ふ在り。今渾口を開て鈎を三つ計こ。又股と四つ計り而もて弦を引渡す時ハ其のごゝく。此弦寸彼渾口ふて五つあるこ毫髮も差なし。故ふ寸尺間町に拘らずして。唯三四五乃矩といふ意味深し。猶口傳云云

平町の始ふ解する所。見込を矩こ。陰ふ用ひ見返を規こ

もて。陽ふ用ひ。即此理也。天文ハ陽ふて円なり。地ハ陰ふて方なり。故ふ股鈎を陰こ。即矩なり。見込なり。弦を陽こ。即規なり。見返なり。故ふ首尾形古傳ふ見込見返の編口を首尾の形といふを規矩合体といふなり

古傳云。或問曰鈎股々真矩十字の本なり。陰の理明け。弦ふ於てハ陽の形なり。此理如何

答曰天圓の中に地方の縦横を取て円徑を引渡す時ハ。圖のごゝく。八段の尾首形を得。或ハ天徑一



鈎三股四弦五則天地方円規矩之理也

尺ヨ結る。六寸八寸の縦横なり。正中より十字の径とひれつ。これハ各三四五寸となる。三四ハ陰なる。五ハ陽なり。即圓径なり。故ふ見返を規とふなる。次ふ三四五ふ満る理是なり。故ふ尾首形の規矩合体といふなり

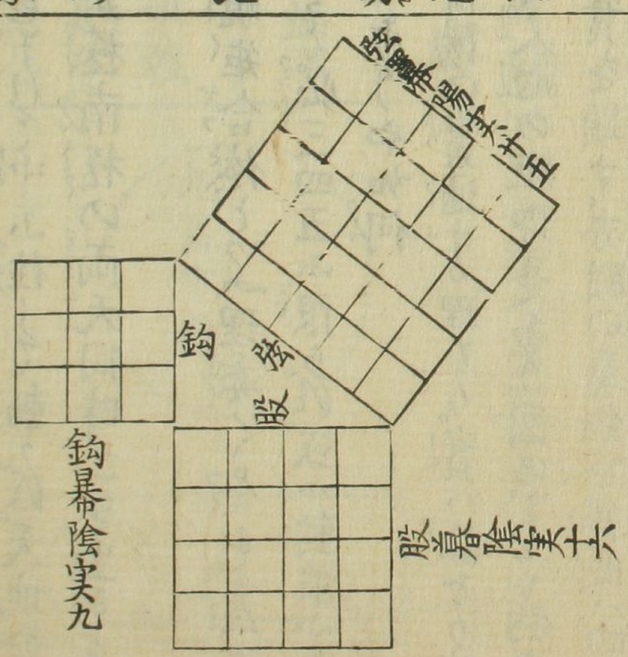
又問曰天径一尺ふ鉤股の理ハ可也。地形ハ四方なるべし。縦横取て而も六寸八寸ふ極るべし。三四五寸ふ作るがごとし。若四角ふ取ハ則弦ハ五ふ叶へども。鉤股の三四ハ乱るるなし。此理如何

答曰六八ヨ作る物ふ非す。自ら六八ふ満るの理なり。諺ハ天一を生ずるの理形を以て是をいへば。又十分の一と下すべし。然るば上下ふ一すづ生じて。中を八寸自定る而して其八寸ふ木を用て満る所の真矩を求るば。横の六寸目

出来す。是天地自然の理なり。然る時ハ各三四五寸を得ゑり故ふ一ようして。二三四五迄を生数とふ是なり。而して六ようして。七八九十迄を成数とふ是同し。右の図ふ一ようして十数迄是ようり。並ふ四方ようり。八極あり。北極南極の気径ようり。黄道の径あり。天地合体理即是あり。天文易道の理ふ同じ猶口傳

問曰上下ふ一を生ずる此理如何

答曰東南の二州西北乃二州昼夜を分つ世界ふ



方あるがごとし。地ハ陽ふ包まれてゆふ住して動うごく。天地分つ時ハ世界一同なり。故ふ北極南極の両天同時ニを生ずるの理なり口傳深〳〵といふ

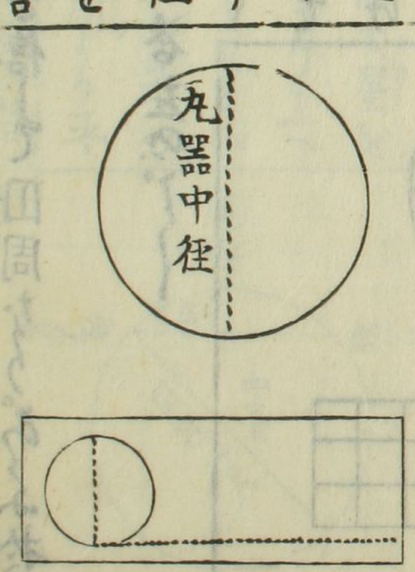
古傳云問曰。尾首形を規矩合体とふ理委く尽を蓋平町の始より尾首を得ること必三四五ふ限らず。或ハ鈎股ふ長短あるも。陰陽ふ合す理ありや如何

答曰此理至極なり。即陰陽の實通ずる理なり。實ハ誠なり其實を顕す者ハ真矩なり。人心の矩即是なり。図のごとく。鈎乃真矩を得時ハ三三九の實を顕す。亦股の真矩を得時ハ四四十六の實を顕す。鈎股俱ふ陰の体なり。故ふ鈎冪九ツ股冪十六俱ふ併て二十五を得〳〵なり。是則陰實なり亦弦の真矩を得〳〵ハ五五二十五の實を顕す。是則陽實なり。然時ハ陰陽等数を得なり。故に規矩合体する理なり。或ハ鈎股ふ長短あるといへども。弦冪の等ふ更に甲乙なし。真矩ふ背ざるをもて本とするなり猶口傳

圓理　二術

渾発術をもて〳〵圓の周と和の術を問答左のごとし

術曰丸器盆盂の類の中径ふ墨と引る。又別ふ板あるも紙あるも図のごとく真矩ふ墨を引。板下の直なる所ふ置此墨條の留ふ丸器中径の墨を能合せ而〳〵半周を摶ゞ尽し中径墨を又能合



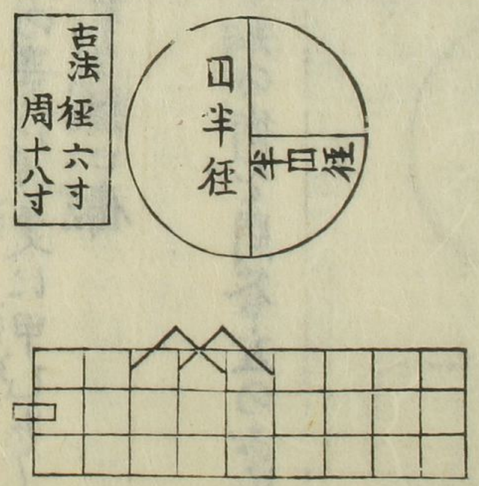
すなわち乃大成す。此半周を倍して圓周なり。ちなみに於て

問ふ

圓の歩を知る術を問　答左のごし

術曰圓の半径を図のごし

墨を付け。是を前術のごとくして紙上に摶じ半圓周して墨をつけて。是則長さなり。又圓の中より半径を横ゝ。是を幅とす。への墨の長さハ圓の半周也。右摶じなる墨なり。扨図を得て歩数を知る□此墨の長さハ中より半径なり。後に得る墨なり。茲に



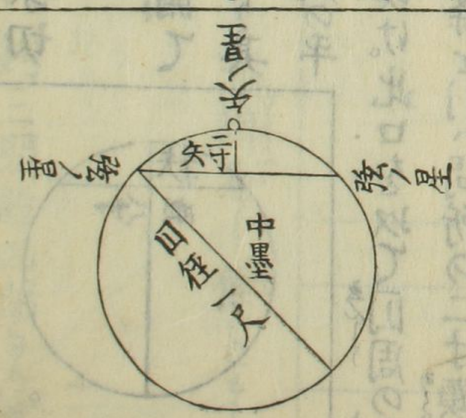
おゐて問ふ

径矢弦　二術

径矢あつて弦の寸を問。或ハ径弦あつて矢の寸を問。或ハ矢弦あつて径の寸を問。三術倶に渾発を用ること同意なり

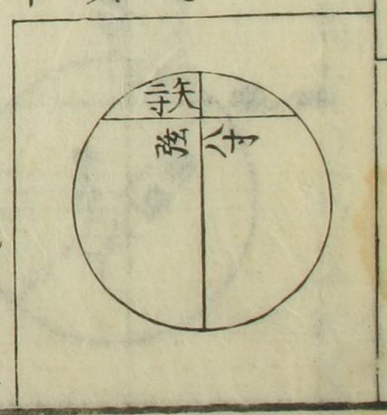
今問平圓の闕矢二寸。弦八寸あり。径幾干　答曰一尺

術曰真矩を設て渾発の口一寸を真矩の正中より。左右へ四つ計て星を突。留八寸の弦ゝ。又寸墨ゝ上へ二つ計て成。二寸の矢とす。然してまた別に渾発を開き。中墨の條と矢の留め星と弦の留の星と。合所より平圓と廻し。實の圓径一尺を得て問に答



今問假令ハ回径一尺ふて弦八寸ふ切て矢寸幾干　答曰二寸

術曰真矩（曲尺なり）を誘て渾発を開て一寸とし此口を以て中條より五口量り其五口を一口ふ合せく平回を廻せば一尺の平回を得るなり扨別ふ真矩八寸口を設け此口を以て回周の合所乃八寸の弦なり是より真矩ふ矢の條を引ハ問所の二寸顕る

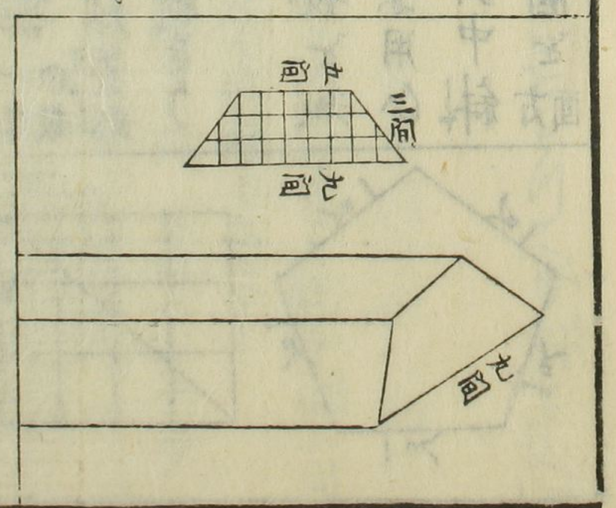


坪諳

坪諳といふハ或ハ錐形楷形或菱形片狹等土岸石垣堀壕築山等の坪を積ると云但平歩を諳ると云とハ少く異ふく大ふ同ど

今問土岸あり馬蹈五間敷九間高三間長十五間あり此坪幾干　答曰三百十五坪

術曰渾発と開き一間の口と定め馬蹈五間敷九間を計て俱ふ合せしむ十四を得る此十四ハ折半ふれば七となる此七つを竪ふ右の高三間を横ふ坪ふ諳ハ即小口平面乃坪廿一坪あり是を長く引き延ふと廿一間なり即是を竪ふ打ちひ扨土岸の總長十五間を横ふ量ハ坪数三百十五坪となる也図を見て辨ぜ餘をまた是ふ準ぶべし



歩諳角形　二術

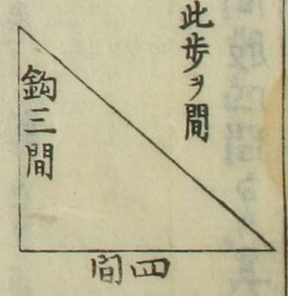
今問曰三角形歩諳（四角縦横の歩諳ハ記ふ及ず）鈎三間股四間あり其

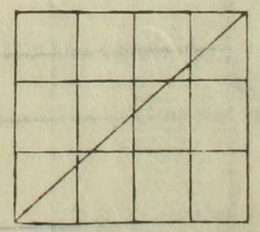
歩幾千　答曰積歩六歩也

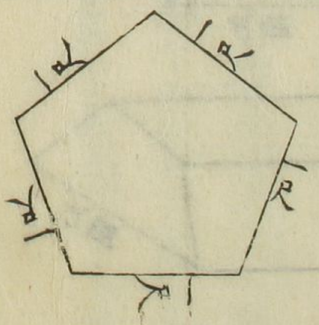
術曰渾発を開く。間尺いくばくの一間なり真矩の尺なり但今用て股四間鈎三間計つゝ。縦横小形を極る時ハ。積歩十二歩あり。是を隅より隅へ斜小半減して。歩積六歩を得て問小答一倍の数を得る故小図のゝゝ半減して歩数を知るなり　或ハ平錐山形菱形斤狹等の歩積を知るゝも各同術なり

又問五角形の歩詰如何

術曰或ハ一面一尺づゝの五角の歩数を知るゝ。五角の形を極め。其一面を一尺小用ひ十小割て寸の口を定むべし。扨其中斜を得て。是を五つ計て長ゝて。半面を面方







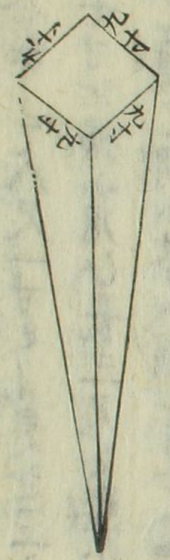
一尺の半ばの横ゝて右の十小割る寸の口をとりて。歩割をはゞ何程までもかくのごとゝ

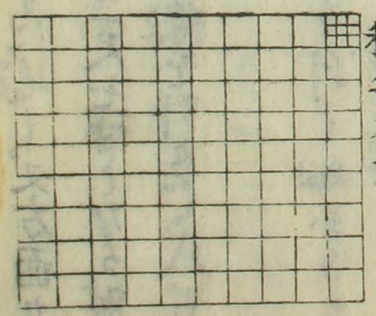
錐形

錐形といふハ。或ハ上方あて下鋭小。或ハ下方あて上鋭る俱小同理なり。四方錐あり。三角錐あり。楔形あり同術とゝ

今方錐あり。四面九寸。長三尺也。其積幾千と問　答曰八百十歩

四面方錐





術日渾発を開さ。一寸九口と定む。是を方面九寸に延し。又方面九寸を合和して八尺一寸ゑ。是を三ふ除すれば二尺七寸となる。即二尺七寸を横ふ用ひ長三尺を竪ふ用ひて墨線を引くべし。八百十歩を得て問ふ答ふ圖を見て知るべし

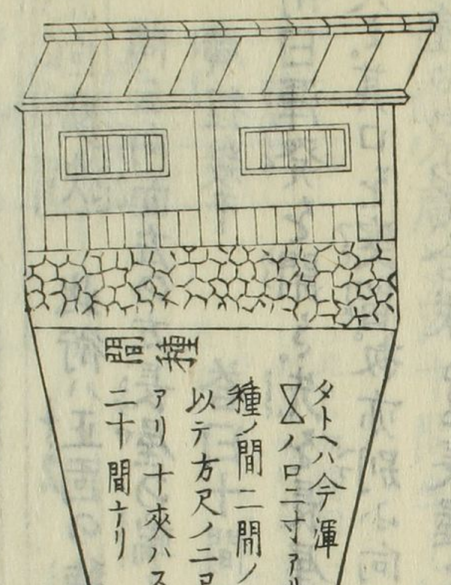
又三面錐の積を知るには。三角の法をもつて知るなり

尤三ふ除して。前術のごとく。歩積を得て問ふ答ふ

平面遠近

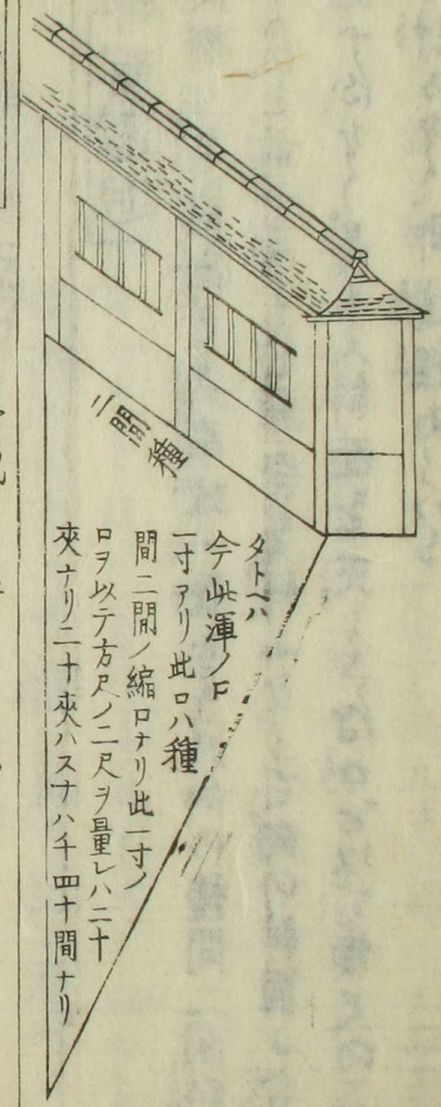
此術ハ向面の種を以て。遠近を量の法なり

術云向の種間二間の左右を。本座より渾発の両鋒夾々。其渾口を種間二間ところゞこゝを以て頰尺二尺を量て遠程を知なり



斜面遠近

此術も亦前術と其事理一致なり。只向の種間二間斜面なるのゑ。前ふ反す。尤渾発を斜ふなして。向の斜面ゑ合如働すふなり。是も又斜面を夾々口を以て頰尺の二尺と計るなり。即遠程あるべし



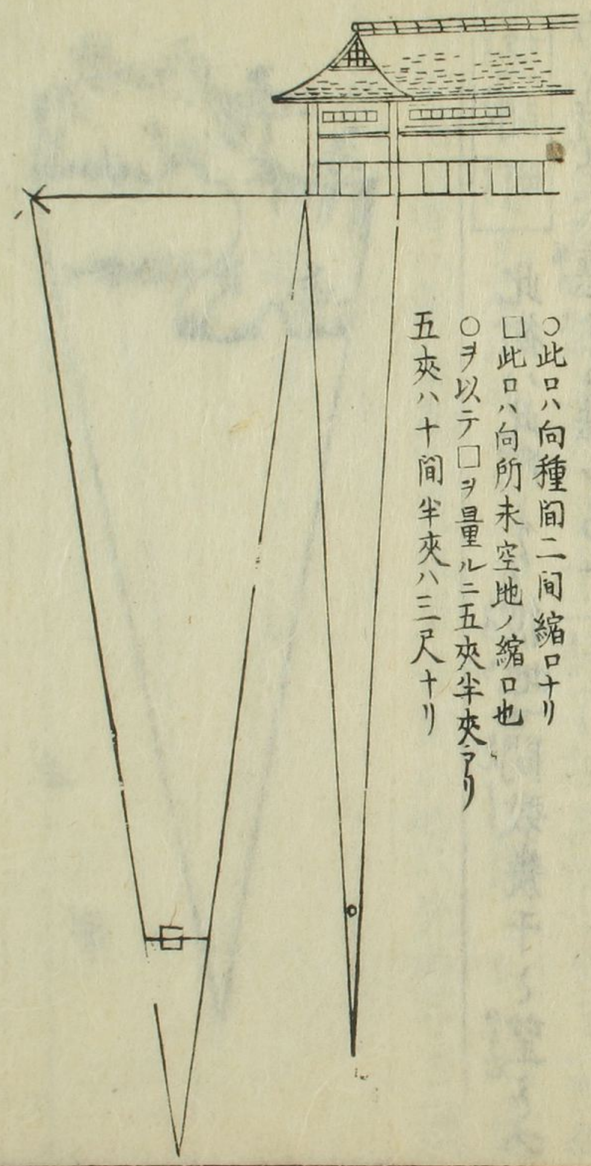
正面廣狹

此術ハ正面の種を以て廣狹を量る法也

問云向面左の方長屋の端より右の方印の所まで正面の廣程幾千

答曰十間半也

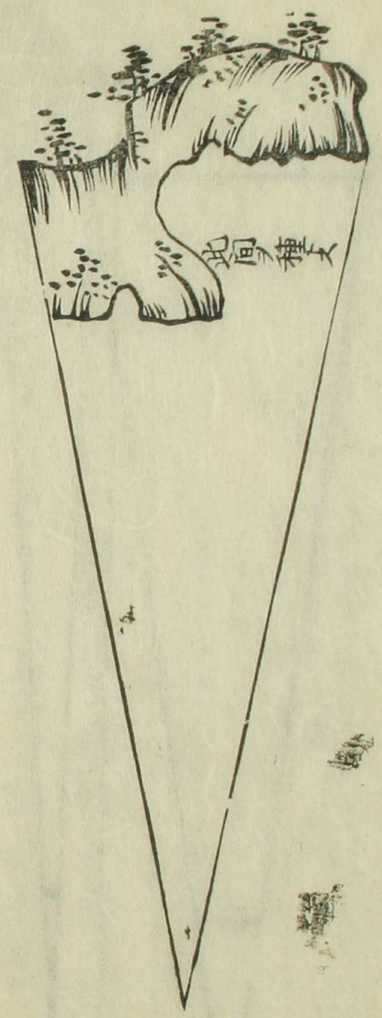
術曰渾発を開き先を長屋と標印との間地を一夾とふ夾と其口を突留扨亦別ふ向長屋二間の種と夾と此二間の種の口をて合求る長屋と標印との間地の大口を計て前面の廣さ幾十間半と知ふなり



斜面廣狹

此術も亦上ふ所謂正面廣狹の法ふ同し。因て其巨細を贅

す。其術大成の理ハ前件ふ所謂正面廣狹の術。又斜面遠近の法を照し考ふべし



横望間町

此術ハ此所より彼地へ間数幾千と望ときの術曰渾発を開き間る。是を以て方尺の横手より望程

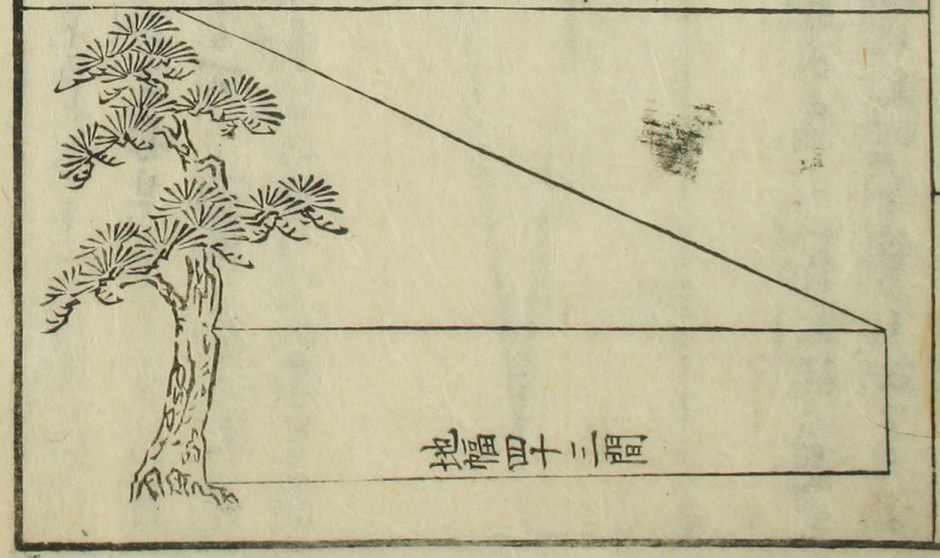
計て其留ふ渾発の鋒を伏て込て見る也。今十二間先を望ハ渾発伏開き。其口ゆて方尺を十二計る。扨其所より至て一間掉と持せ先へ遣す。右渾発の口ふ合こる所十二間と知る。尤違こるを見る時ハ竿を立て見也。若長間の時ハ先の竿を二間みを三間みるもすなるを

知諸高下

此術ハ城楼堂塔の高竹木家屋の高さ。山岳丘径の高さ總じて高下を求る法なり。尤豫め地幅を量て知ておく

上の術なり。地幅とハ。此所より彼所へいづれにても。其量るべき物の地下までの遠程のこと也

術曰今図する所を先地幅と四十三間と知是ハあらかじめ計ることを知て置なり扨渾発を開て。本の根と目通地上五尺上とふ當を圖のごとく。渾発すて是と夾こ。其口を紙上ふ突留て。扨方尺ハ地幅なるゆへふ新ふ方尺と四十三間の地幅ふ計ることを合せて。その今計合せて渾発の口をもつて右夾こ突留たる大口を計ることを其



ふ居する長を加入して木の總高と知るなり

若此術違ることを試んと欲せば。右の方尺ハ地中四十三間ふ准じたる方尺なるべば。則是を地中ふ用ゆ。渾発の口ハ方尺二尺を地中四十三間ふ計合せて。一間の口を用て向の木本へ一間の竿を立させて。是を夾こ見るふ。右渾発の口ふ竿の一間必至ることを合ることを。違なきを知る尺をもて地幅を計りたる時ハ尺をもふふ立ふなり

極諸高下

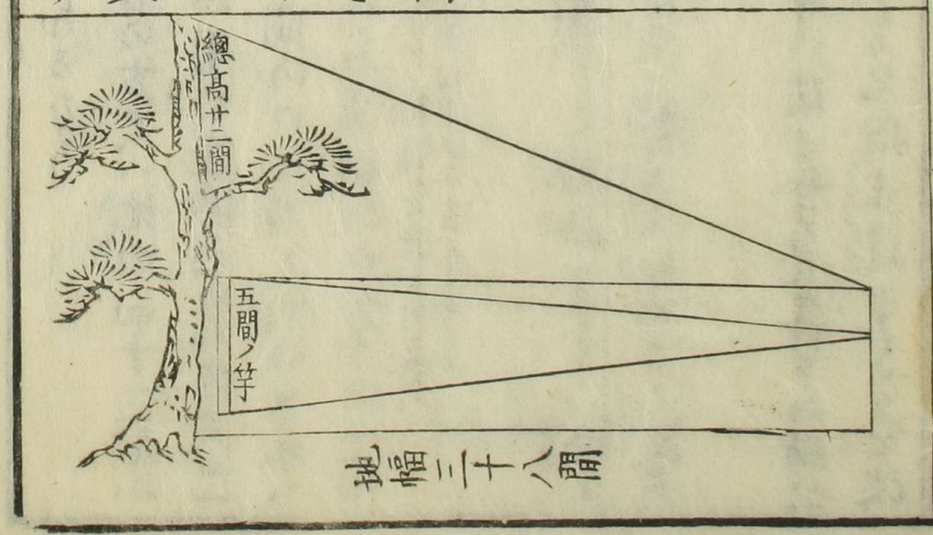
此術ハ兼て量ることを置たる諸高下幾重て又齟齬なきことを試こと見る法なり。其事右ゆも祖記したまだ贅言ふ似たりといへ共旧法捨るふ忍ず爰に贅す

今左ふ圖するごとく。兼て地幅を三十八間と知ることを。又高下の術にて。木の總高をも廿四間と知ることなり。此術若違なきことを改

先見ふなり

術曰先木の高を廿四間と知て扨右の三十八間の地幅ふ方尺を計合せる渾発の口此口ハ一間の縮口を五ツ合すれハ五間なり と五ツ計合せ。其五の合る口を以て向ひ五間の竿ヲ立てあるを夾て見るふ。其渾発の口向ふ立てる。五間の竿ふ必至と合ふ。ハ。術ふ誤ると知るべし。猶前件を照見すべし

一傳ふ云。此術ハ片極を竪ふ用る理なり。或ハ天守矢倉の重々を糺し。又三分一五分一等を求る所ふ答なり

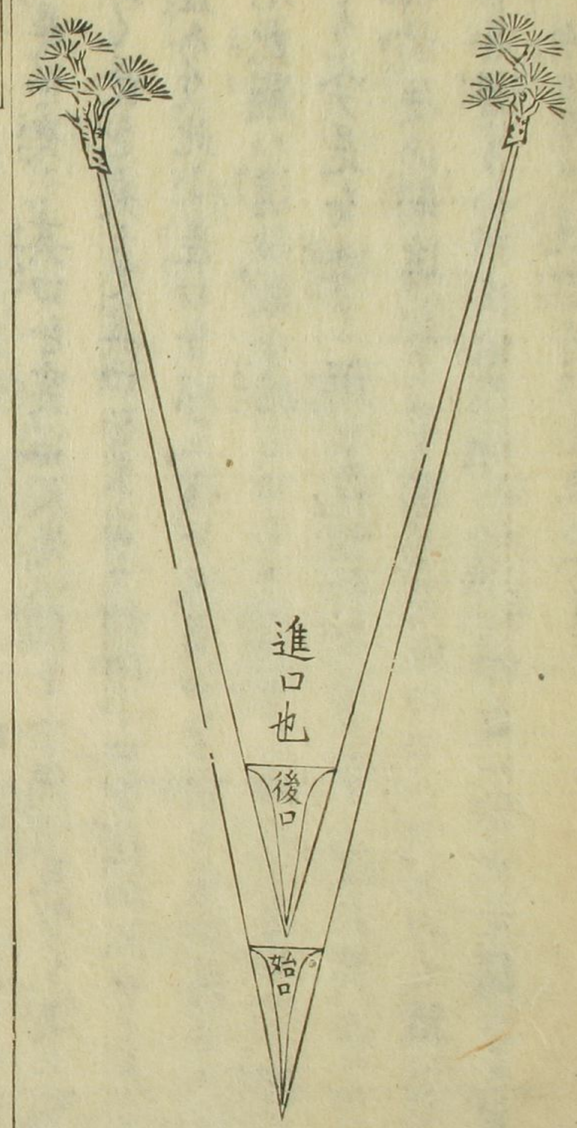


故ふ指高何分ともふなり云云

天口 進で量るを天口と名く陽ハ進むの謂なり

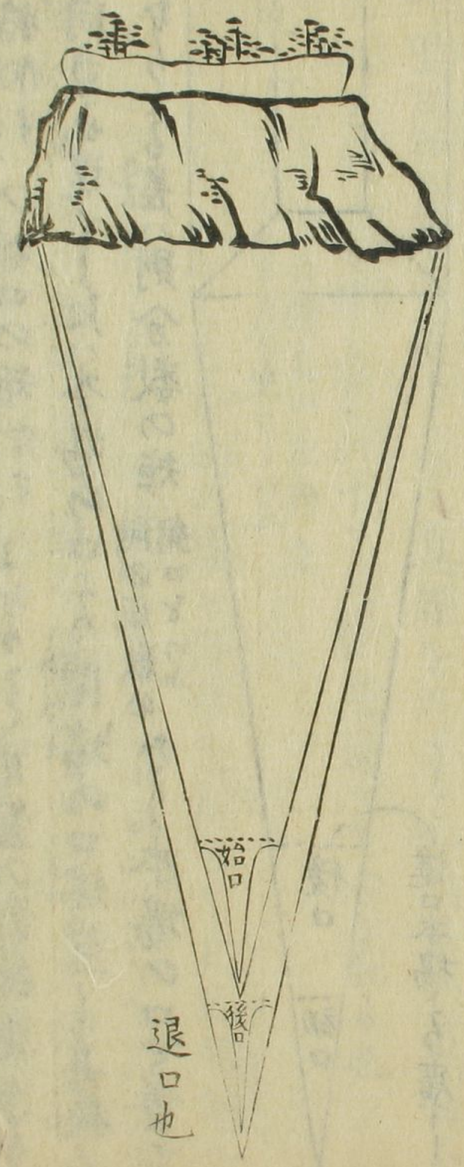
此術ハ進で遠近を知の法なり

今図する所を以て云。向正面左右ふ二株の松あり。渾発を開き て。是を夾こ。其口を突留又先へ間を十間ふ究めく進こ。始の 如く。長を夾て其口をも留る。始の小口を後の大口と大小の 差あり。此小差口を以て後の大差口を計る。是則遠さなり 尤此圖ハ進む故ふ捨る口なり。但退く時ハ小差口一ツ捨ふ なり。今是を委く解せば。始の口二分あり。後の口八分なり 其前後の間進むこと十間なり。始の口二分を以て。後の口八 分を量るふ四夾なり。但一夾ハ十間なり 四夾ハ即四十間なり。是 即求る所の遠程なりと知るべし



地口 退て量るを地口と名く陰ハ退くの謂ろ

此術ハ退て遠近を量る法なり。前術の天口と。其法同支也と意得べし。天口ハ進こ地口ハ退くに違あるに因て差口を用ると捨るとの別あるまでなり。天口地口互ゝ考合すべし

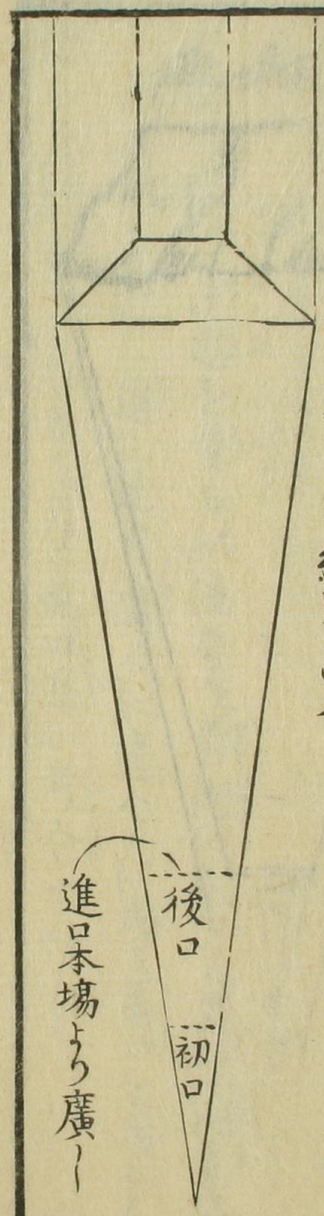


天口 或傳云渾発の差口を殊ゝく量るを天口とゝふ

傳曰本場より進退の分数間のハ。見盤ゝ倍して。六十分一を用ゆ。凡四十分の一なる時ハ差なし

術曰先目的まで空眼を以て。何十何町と考へ。扨鍔ゝ渾発我指て。目的の山ゝても。峯ゝても。木ゝても。或ハ村里の境ゝ

境までなりとも。幅のあるもの。其渾発の口ふ合せて見込せ。假令
ば其口五分なら〻。五分を紙ふ突留め四十分一の分数を進
て。又見込ら〻ハ。假令マバ五分三厘まである。最前突留ら〻る口ふ
為て。其廣分三厘なり即進所の分数開の間数の矩と知るべし。其
三厘の差口を以て本場の口五分を量りて。町里をハ求む。三
格渾発と作すの物。四の矩方尺を作すとなること見盤の前後進退と
同意也。退ら〻ハ。本場の口ふり開場の口縮むべし。其狹く
なりる差ハ。則分数の矩開の間数の縮口を作すなり。本場の口を量て

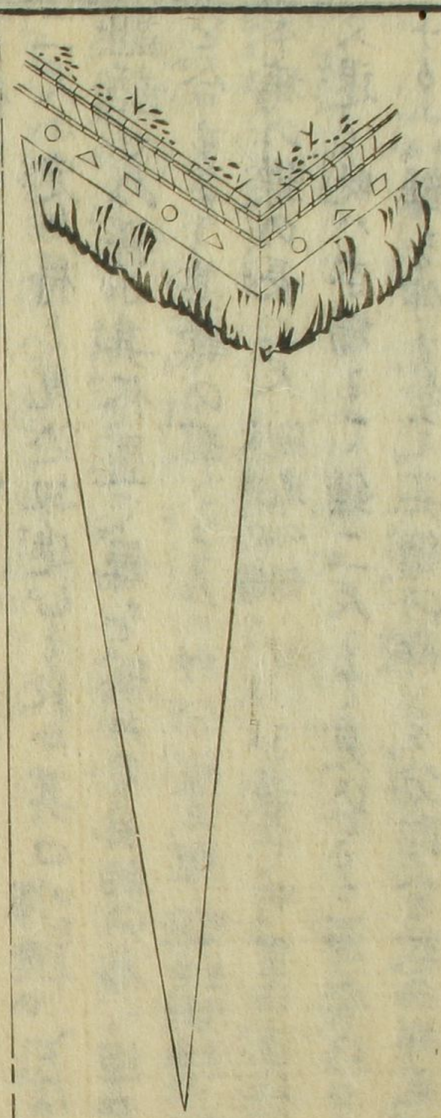


町里を知る。尤進退すること真矩を外さる也進退の真矩を
分数を極めて竿ふて打すら〻ハ見通して心ふかる也

地口 或傳云頻尺の屈伸を以て量るを地口という

其術云先何ふても目的の廣を渾発を開きて見込時。鏍を
二尺ふ定め得と見込。扨進むら〻ハ其口渾発のとばすも
齟齬せぬ様ふ其侭置て。鏍を縮めて目的の廣へ渾発の口
と合すること。其鏍の縮むる差ハ即分数の矩開を間数の縮を作すを以て
本場の鏍の長二尺本場の鏍ハ二尺開場の鏍ハ縮むを量て町里の遠程を知る
又退く時ハ本場すて鏍二尺すて見込る渾発の口ふ合
すること。鏍を伸すること。其鏍の伸る分。即分数の矩也。此伸
なる差の寸分を以て。本の二尺を量て町里遠程を知る。是も
向の鏍の差を以て量る故ふ地口と云。差の用ゆ天口と違

〻ハ四の矩の天口ハ三拾ゆて三つ量つ地口ハ四の差ゆて四を量る故なり。三四五の理を以て真矩ハ進退するとを考べし



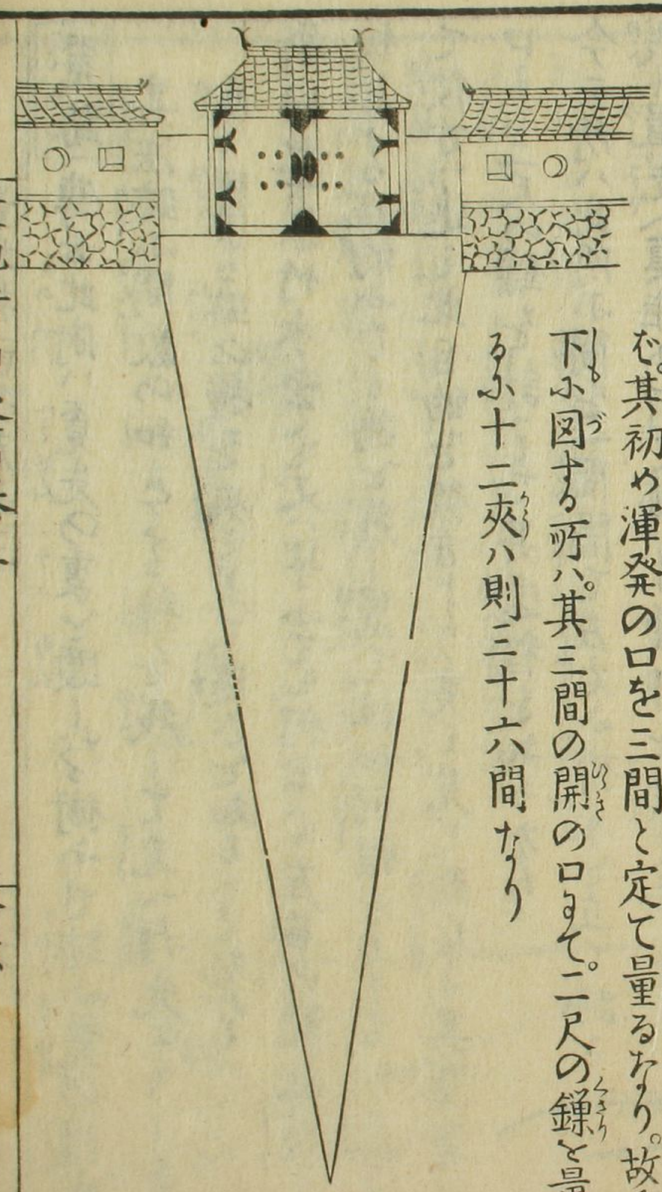
覔先

傳云此術を覔先とふハ。先ハ覔るの謂也。此より彼遠程を計るハ此方より間数の知る種なさ故ハ。目的の方の目ゑさ物を假の種ハ用ひ術を勤めて後彼所ハ至つて。彼假の種の間数を直ゑ計見て。實の遠程を知也 国図等の節ハ此術多くあるとゝ

術云先此方ゆて向の假目的を夾ゝて。其渾発の口と其侭ハ置

扨向望の場ハ行て彼假の種を鷲直ハ量つとるハ。種幅三間あるで。其初め渾発の口を三間と定て量るなり。故ゑ

下ハ図する所ハ。其三間の開の口ゆて。二尺の鏁と量るハ十二夾ハ則三十六間なり



覔跡　傳云此術ハ覔先の裏と顕したる術なり。跡ふ覔の謂也

其法跡ふ間数の知たる種を残して先へ行先ら〳〵

残し置る跡の種を夾み見て遠さを知るなり

術曰此方ふ竹木なとも又ハ竿なとも何なとも左右の間数慥

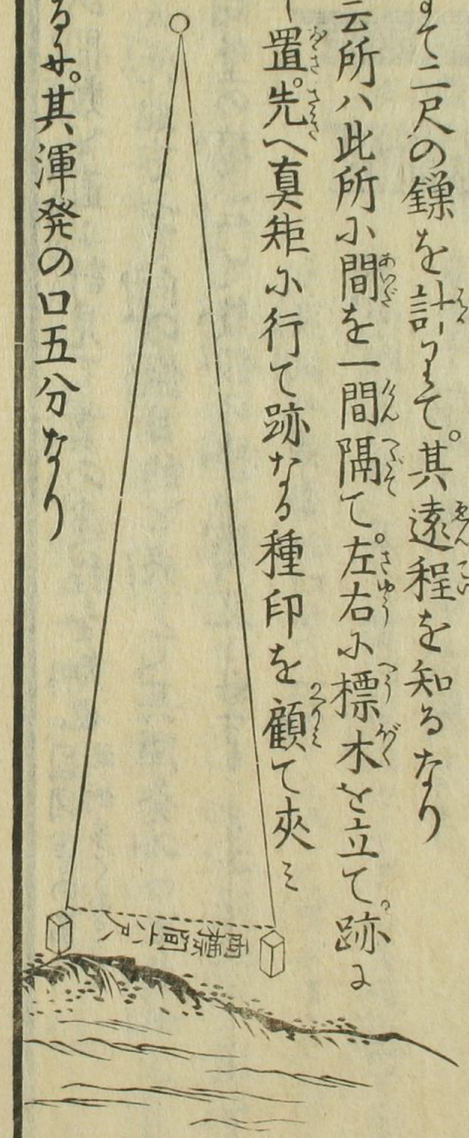
知たる目的ふなる物を残し置て扨如何程なりとも心ふ任せ

て彼方へ進む。此目的を彼方より夾み見て而后ふ其渾発の

口すて二尺の鏡を計りて。其遠程を知るなり

今云所ハ此所ふ間を一間隔て左右ふ標木を立て跡ふ

残し置。先へ真矩ふ行て跡なる種印を顧て夾み



見るなり。其渾発の口五分なり

此渾発の口五分ハ此口を以て二尺の方尺

種一間の縮口なり

と量る時ハ四十五夾なり。四十五夾ハ即四

十五間なりと云る也〳〵

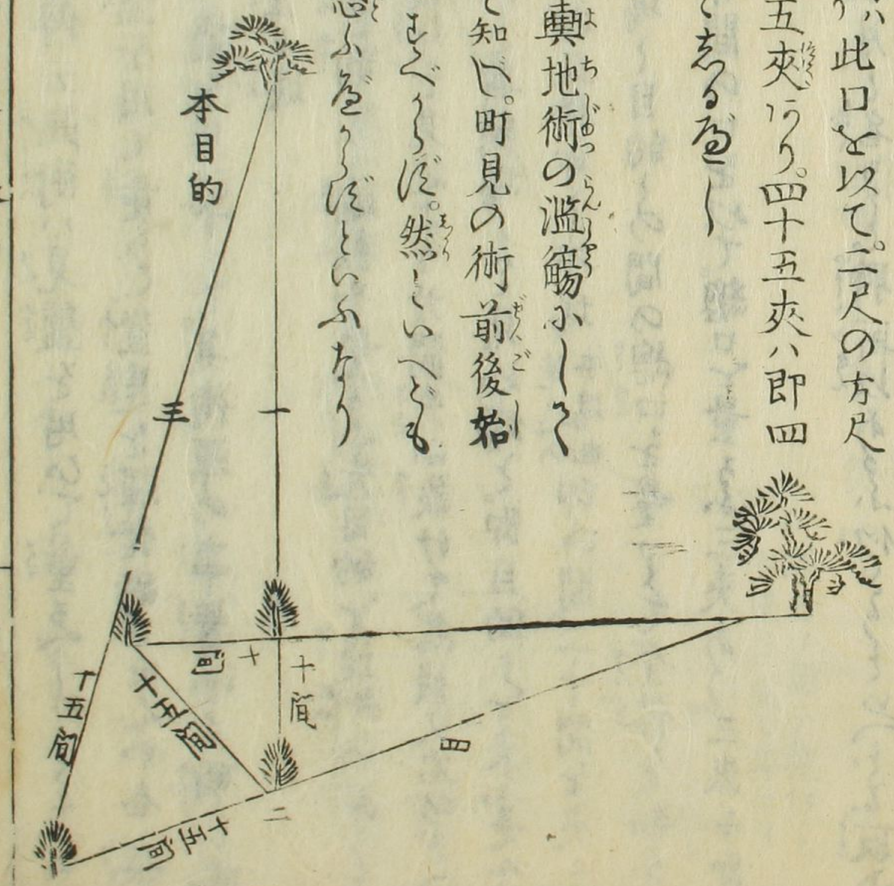
草結

旧傳云此術ハ輿地術の濫觴ふして

又能旧格の本と知べし。町見の術前後始

終此理を外ふもぐらべ。然しかいへども

實測なるを惑ふ也〳〵べしといふなり

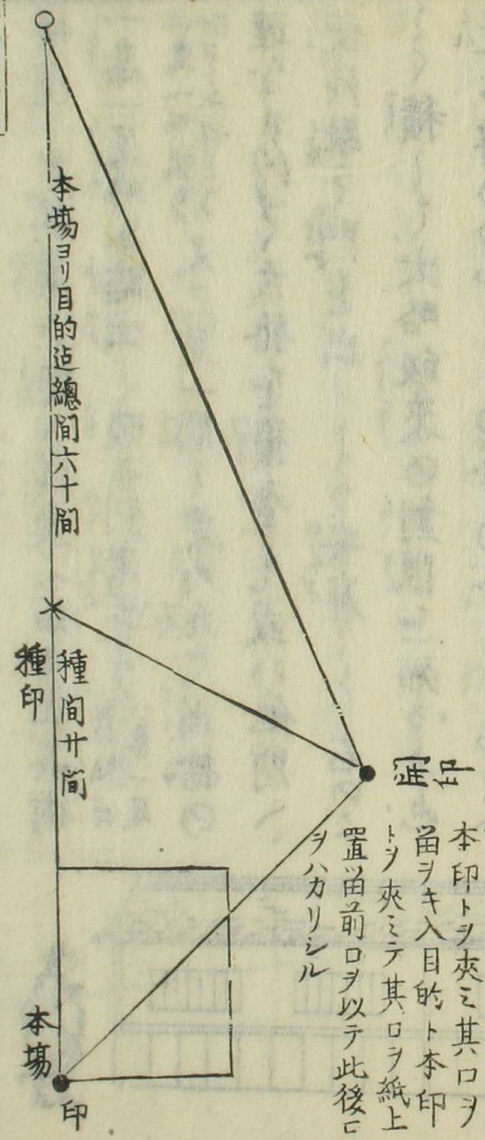


水月

古傳云此術ハ見盤を用ひて量る〳〵〳〵云
昌弘曰見盤を用て量らゞ豈是を渾発術と云んや今按
ずるに全く見盤を用ひずして其術渾の事業ゆゑ明白也
くり〳〵左ヨ述

術曰今正面の目的まで遠程を量るに先目的を通例のごと
見込扨新に種印を見込より廿間先に設けて然後又右の方へ
横斜に進み開き其開場より見込場と即目的とを夾み是を
紙上に突出置扨又種印と本場見込の本場也印の間二十間を夾み
此口を以て本場と目的との間の總口を量りて全体を知る
今此種の間廿間の口を以て總口を量るに三夾あり三夾を即
六十間なり
或曰此術を水月と名ること聊所以あるに似たれども取ふ

足ざる説なり古傳又嗚呼の〳〵多〳〵笑ふべし

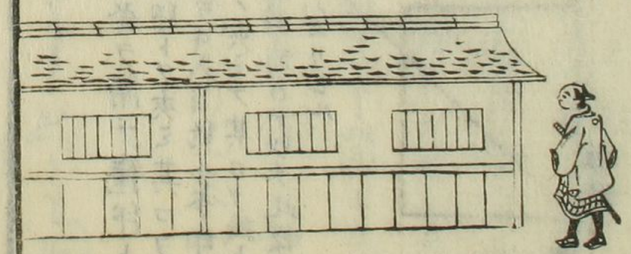


様脚

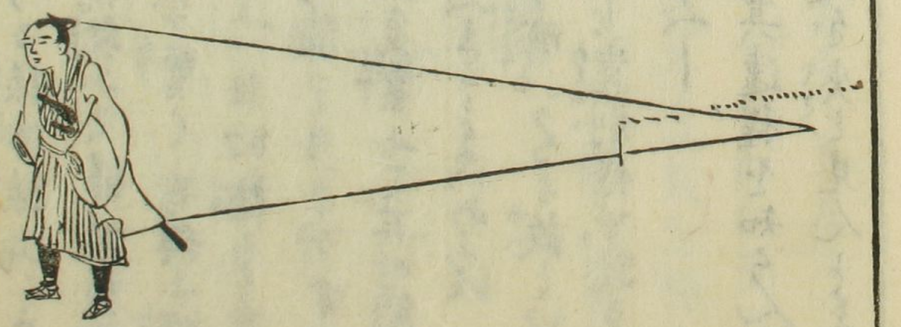
此術ハ向面の物陰を人の通行するを見て其歩数を試に向
面の廣さ幾丈と知の術なり古傳にいふ処なり
術曰古傳に云常に歩数を呼吸に合せて試に置て知るなり

大体一呼吸の間ハ遅さハ二三歩。速さハ三四歩也。其中と考へ量りて。是を以て糺し試べし。其廣程を知る也と云

又古法式傳云。森林の陰。土手の陰。長屋の陰。凡物陰を通る人を陰へ入さる前ハ遠所より望見て陰を通りすぐる間安座して。其廣さ遠さ共考へ知る也。其術一息一足呼ハ蹈出し。吸ハ引考なり 昌弘日 一息一足 の考へ呼吸を知ざるハ似なり 又三足一間と定め。凡て用捨の理をもて。大格を積べし。或ハ他所へ使共馳て門を出しなり。安座して右のごとく積して。大略飯来の刻限を知ると也是古傳のなり。今のおもなるハ



様体 此術ハ彼方ハ立る人を種とし此方より其所までの遠さを知る術なり術曰渾発を開き向ハ立る人を夾て見て。譬ば其渾発の口二分ハ八十三間二尺。三分なれば五十五間三尺。四分なれば四十一間四尺也。餘ハ是ハ推知べし。右何も鏡二尺を人長五尺へ乗し。即渾発の題る口を以て除す。叔又一間の法六尺を以て除けば。遠程何程と知なり凡人長を五尺とするも大略なり。殊なり急なる場ハその業ハ用捨の格を用ひるなり

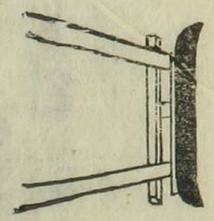


又旧傳ふ様程といふ名目あり。其術を考る様体様脚と其支一般なり。根其名目を立たんと見め。既ふ又様体様脚別術ふ非ず。是も一術となして然らんも今暫く古傳ふ隨て此み是を述ぶ。昌弘曰。様体様脚といふハ目的種なさの地と又ハ山陰土手陰。叢中との諸の術障を多き所ハ人の歩行の跡の数を以て種〻一本ハ支業ハ。其町間を量を知るべきもの。好で試ふ用ゆべきものハ

白浪術といふハ。旧傳ふなづけなる所ハ。なる故といふを知らず。昌弘考るふ。寛先術と同じ。豈別條と設るふ及べんや。是又好事の説なりと察すべ〻

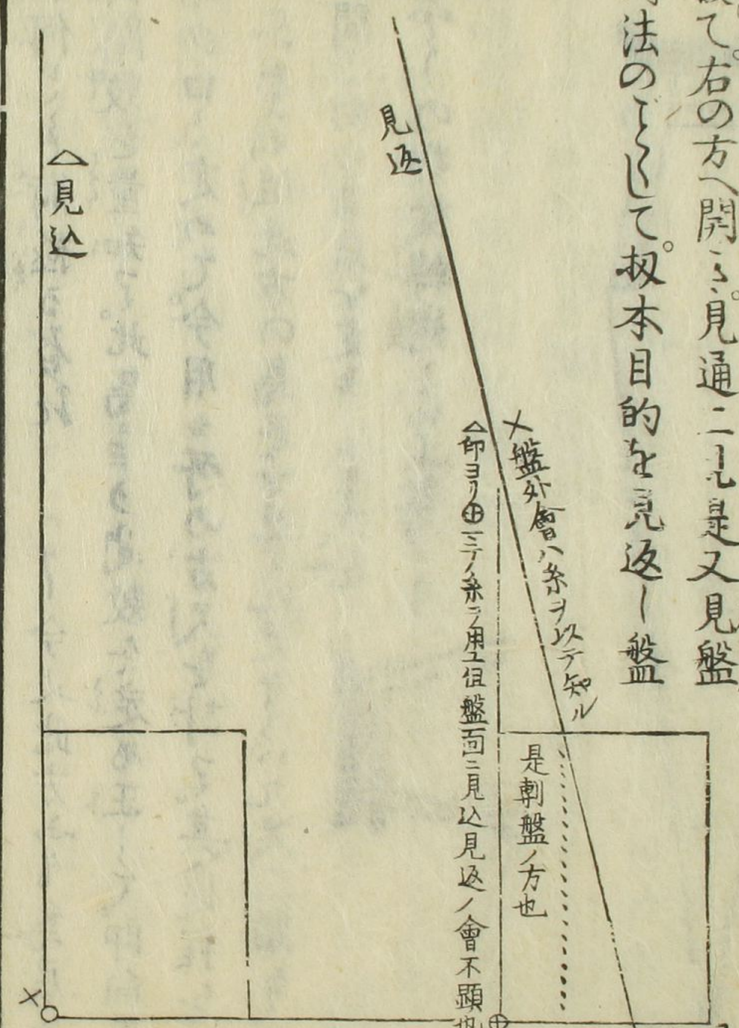
術曰今圖するところの彼方の鳥居まで。其遠程を知らんと欲するふ。向の鳥居其間数を知を。故ふ是を夾て見んとき

如何とも術極る。今又此方ハ鳥居あるを其間数を量知を。此鳥居の間数を定め正〻て。即向面鳥居の口と定めて。今用ゆる所の方尺を計を。其遠程を極め知ふなを。但此方の鳥居を見て九尺なるハ九尺二間なるハ其間二間と向の鳥居を定る　　　元一



〻の類機轉術とい〻なり

猥獲 此術も又旧傳・・盤を用て遠里を量るゝ云術曰先見盤術作法の如くして正面の目的を見込開地を設て右の方へ閃き見通二見是又見盤術法のごとして扨本目的を見返し盤



面ゟ墨線の會出來ざるゟ困て糸を引て盤外ゟ會を制し是を量るゝゟ委くハ図を見るべし

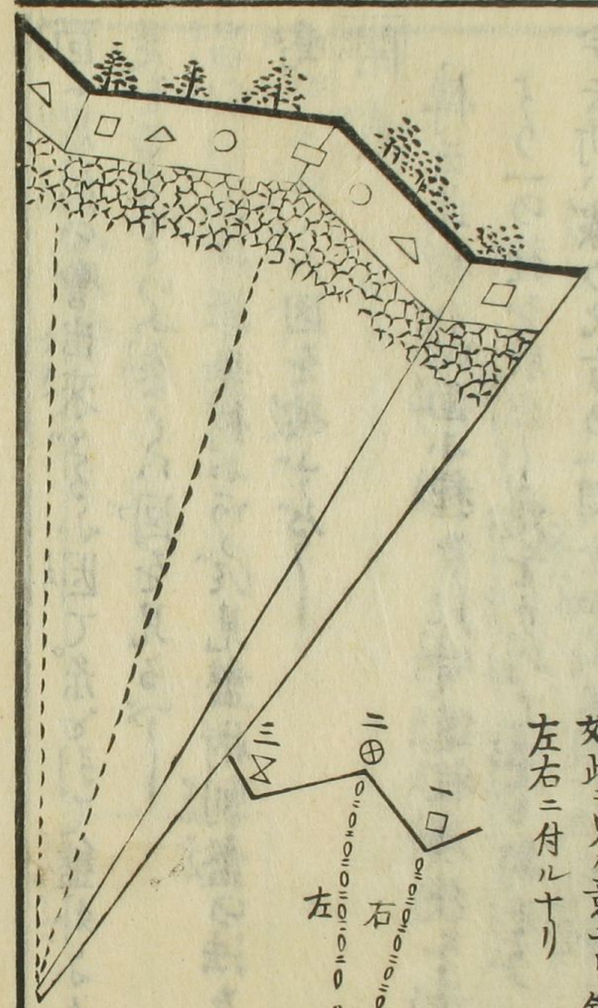
昌弘曰此術渾発術ゟ行ひ見盤術剌盤の法なり。例乃嗚呼ゟ。詳ハ図を按ずべし

開扇

傳云此術ハ向面ゟ種なる時。遠程廣狭を量る時に外より一の種を取出し。是を用て量る術なり

今云所ハ豫め此方の一間を知る。扨是當術ニ渾発を用て。此一間を夾ミ遠ゟ浅量を知る遠程八間なり取出す種なり扨又二へうつるゟハ分間して一の塲の左の鏍を遠さ八間計るゝ鏍を右に付け二の塲を鉾ゟ見る。尤分間の口を残し置此分間の口ゟ今見る二の塲の左の鏍を計る。幾間幾尺と知る

扨ハ三の場へうつる。又三の目的を見るも。二の場の術と同意なり。場所何程ありとも。是すて倣ふべし。此術ハ鍎を渾発の左右に付るなり



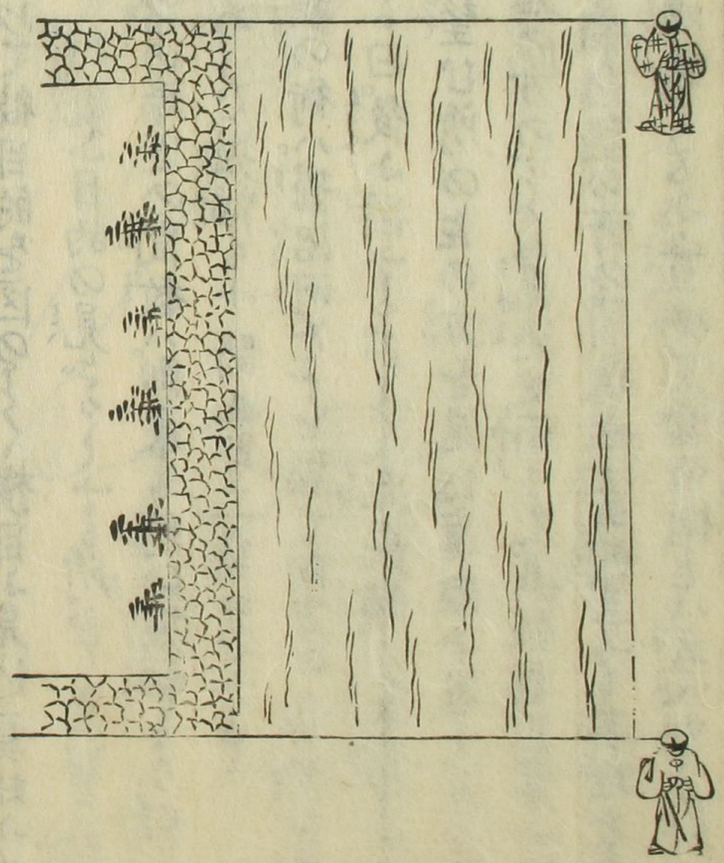
如此ニ見ル意ナリ鏡ヲハ渾発ノ左右ニ付ルナリ

方鏡

古傳云是ハ堀幅川幅等を知るの術なり

術曰先堀端ふ臨ミ。向の屏すても。石垣ふても目ざる所を撰んで目的をう。左眼を以て彼目的を図のごゝ横目ふ見込。真矩ふ進なゝ。尻目ふ掛て行。既ふ目的の見ぐるとする所ゑて。立留る初の見込の場をう立留の場迄の間数ハ即求る所の堀幅なり。假令ば進む間十間あゝだ。堀幅も十間也。即二角の心なる一説ニ曰此方鏡の術ハ堀沼河なゝを隔て向方の廣狹を量る術なり。其法ニ曰。後ふ図するごゝ。先堀端ふ正當う立て。左眼を以て望む所の左の方を見込。真矩ふ進ミ。左方の望の所ゑて。又右の方のごゝ見込せ。而ゝて其堀端正當ふ進ゝる歩数の間。即堀向望の所の間数也と云。何ゑふも其理なるにわゝ。然ども両様ゝもふ。實側正當の術ゝハ云べかゝべ

量地指南後篇巻之五終



跋

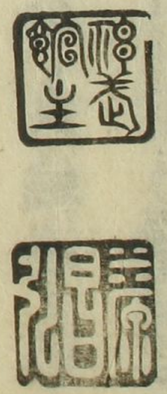
享保の季年。量地指南前編三巻を選集して。世上に擴む。繼て後編述作いとまを。諸侯子乃需止叉なく。既に許諾の志ありといへども。公務餘力なく。心の外に黙止す。其後不圖病痾に羅て苦悩程久し。卒に痼疾となりて藥劑無驗。起臥不遂。因て不得止致仕閑居すること。茲に十有餘年なり。予成童の昔より。武學兵術に癖して

主用繁務の中とつゝも此道のゝ一日も不棄し。其後病ふ沈もて。講習を廢せて。既ふ右ふ云るゝ如ち況や其他の事藝。量地の小技をふ。誠ふ其術忘ふるに似たり。然るふ此頃。奥州乃山岸定則。予ゝ閑隱の扉を扣て。量地前編の余意を索るゝ頻なり。予再三病を以て辭ゝるゝも。不肯強て請ふ不止。其深切他ふ超へ。其勉強人ふ勝ゝり。其為人此道ふ俊發なること。世ふ又類少し。依て不顧前後點首

ゝ。直ふ愚息昌言ふ命ゝて。予ゝ弱冠ふ閲見するゝ所ふ。彼是の書五六部ふ内。前編ふ淺たるふ物を拔萃ゝて。山岸氏ふ授て暫く其責を塞へ。元來此書予ゝ全ふ編述ふ諸本の訓詁補て。拔萃ゝて。然ゝ的當ふ深理ふ入ること。幸に人ふ賞ゝるも予ゝ謙ふ信ふ振雜の齟齬ふ入て終ふ世ふ謗らるゝも。予ゝ駑庸ふ甘ふ

覽者ゝ小是をおもふ

寶暦四甲戌夏六月　村井蘊道子昌弘書



文化七年歳次庚午春穀旦求版

大阪書舗

高麗橋通　藤屋彌兵衛

心齋橋通　藤屋德兵衛

高麗橋通　藤屋善七